





定

本

小川未明小説全集



定本 小川未明小説全集 2
小説集 II



昭和54年5月6日 第1刷発行

著者 小川未明

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 111-2

電話 東京 (03) 945-1111

振替 東京 8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

定価 3500円

©岡上鈴江 1979 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。(兎一)

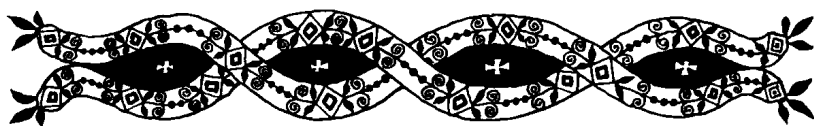
0393-448224-2253 (0)



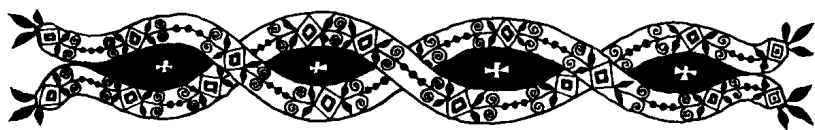
定本 小川未明小説全集 2

小説集 Ⅱ

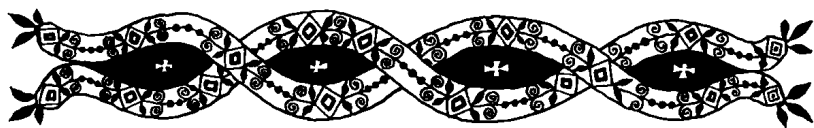
目次



樂器	219
白き花咲く頃	187
白痴	173
凍える女	161
僧	149
點	139
心臟	124
偶然の事件	111
赤い毒	100
鳶	85
太陽を見る兒	80
簪	71
魯鈍な猫	7



尼に	348
無智	343
落日	337
下の街	319
露臺	305
底の社會へ	281
黒煙	274
白と黒	265
拔髮	262
奇蹟の母	259
蠟人形	253
黄色い晩	245
赤い指	232



装丁

武井武雄

解説

山室
静

401

路上の一人

384

石炭の火

363

定本 小川未明小説全集 第二卷

小説集 II

魯鈍な猫

一

氷を噛んで来たやうな、北風が、白く鈍色に光つたレールの上を吹いた。汽車に乗つて既に幾十分か幾時間か前に此の驛を出發して、何處にか行つてしまつた人々の捨てた紙切れが、當もなく地面に轉がつてレールの上を越して行つた。

並んでゐる倉庫の三角形の家根と家根の間から、遠い北の國境の山々が見えた。まだ其等の山には雪があつて花崗石を刻んだやうに頂きが鋭く光つてゐた。青い雲切れのした空が慰めるやうに、山々を見おろしてゐた。

私は、停車場の外側の、風に吹き晒されてゐる柱に身を凭せて、北國から来る汽車を待ちつゝあつた。其の汽

車にはまだ互に顔も知らない十二になる女の兒が乗つてゐる筈であつた。其の兒は孤兒である。故郷にゐる叔母が、子供の守に世話してくれたのであつて、私が旅費を送つて呼び寄せたのであつた。

まだ、汽車がこの停車場の構内に入つて来るには十分ばかり間があつた。其處に私の傍に、二三人の者が立つてゐたけれど、何の關係もない、始めて顔を見た、而してまた直に其の顔を忘れてしまふやうな人々であつた。其等の人々も、やはり、誰か汽車に乗つて来るのを迎へに出て待ちつゝある様子であつた。

其の中の一人は、手荷物取扱ひ室の窓口の上に懸つてゐた、大きな時計を見上げて、何やら口の中で呟いてゐた。時計の白い大きな圓い顔には、二本の黒い針が時間の推移を差し示して、永遠に人間の憎愛から離れて、冷かに淋しく流轉の眞理を語つてゐた。

褐色の襟卷をした、瘦形の女の人は、黙つて、プラットフォームの低い柵に片手をかけて、頸を伸して、汽車の来る方を眺めてゐた。けれど、まだ、汽笛の音は聞えなかつた。

私は、是等の人々と過去に於て、現在に於て、恐らく

また、未來に於ても何等の關係がない。たとへ是等の人が悲しいことがあつて泣く時でも自分は、其れを知らう筈もなければ、共に泣く理由もない。同じく、自分が生活のために苦しみ、若しくは病んで死ぬとも、是等の人は、其れを知らう筈もなく、同情せぬとて憾む理由もないのである。

其時、私は、二たび、幾百里隔てた遠い北國から汽車に揺られて來つゝある孤兒の少女のあることを思つた。會て、この孤兒とは互に顔を見たこともないのに、偶然に顔を知り、偶然に物を言ふやうになつた、人生を繋ぎ合ふ目に見えない約束といふものが不思議でならなかつた。

私は、獨り柱に凭れて眠としてゐる所在なきに、敷石の上を下駄でコツコツと鳴らしてゐた。而して、今頃は、汽車が何處の邊りを黒い煙を上げて走つてゐるかと思つた。

ふと、倉庫の家のあたりを見ると、黒い鳥が一羽、五ツある倉庫の右から三つ目の家根に止つてゐた。鳥にしては、少し體が小さいやうに思はれたが、やはり鳥であらう。彼方に幾つも立つてゐる煙突から黒い煙を吐い

て、空の色は濁つてゐる。私には、何故此の鳥は、都會などに住んでゐずに、廣々とした田舎へ飛んで行かないのだらうかと怪しまれた。

二

雲の切れ目から、黄色く落ちる夕暮方の日は、飴色に電車の硝子窓を染めてゐる。私は、神經衰弱にかゝつてゐると見えて、車臺が左右に揺れるたびに、頭痛は激しくなつた。而して、胸がむか／＼して吐瀉を催して來る厭な氣分を堪へてゐた。

電車は、街の中を走つてゐる。夕日は、町の建物をも色彩つてゐた。さながら地球の上に、黄色な惱ましい軽い熱病が見舞つて、いづれのものもこの熱にかゝつてゐるやうであつた。私は、この夕暮の光線の中に浮き出てゐる赤い色の看板や、黒い煙の立つてゐる煙突などを見まいものと思つた。何となれば、こんなものを一々見てゐると眼が暈つて來て、益々吐氣が催はして來たからであつた。靜かに臉を閉ぢると、電氣をかけたやうに痙攣を感じて臉の上が痛んだ。

何時の間にか、眼を開けて、他のことを考へ出した。僅か十二歳にしかならない北國から出て来た少女が、汽車から下りて、右も左も知らずたゞ一人、停車場の構内から、この賑かな通りに押し出されたら、どんなに驚くだらう。此の次に着く汽車は今日の夜中であつた。私は、もう、一度迎へに出て見ようか、其れとも構はずに置いて見ようか。冷かに運命のまゝに突き放して置いて見たいやうな心持にもなつたので、何方にしたらいいか決心が出来なかつた。

「今日は立たなかつたのでなからうか。」

こんな餘計な事件が、樂しみの少ない、淋しい自分の生活を掻き亂すのを腹立しく考へた。早速電報を打つて聞き合はして見ようかと思つた。しかし、このこともまた決し兼ねて、遂に家に歸つたのである。

戸口に來ると、家の内は依然としてひっそりとしてゐる。私の心は、また、急に暗くなつた。

「來はしなかつた。」

と言つて、手荒く襖を開けて入つた。

其處には、南向きの障子の方を枕にして、病み寢れた妻が、二つになる幼児を抱いて眠つてゐるのであつた。

妻は、靜かに細く臉を見開いた。其の眼の中は、弱々しく、力なくうるんでゐた。亂れた頭髮は、枕の上に垂れかゝつた。

私の顔を見ると、妻は、微かに笑つた。青い笑である。私は憫れみ、且つ優しくしてやらなければならぬと思ひながら、もう幾日もかうして臥てゐる女を見るのが不快でならなかつた。

「何うして、來なかつたのでせう。」

と、咽喉にひつついたやうな乾いた聲で妻は言つた。

私は、陰氣な霧の裡に居るやうに、心が重く苦しくていら／＼とした。而して、慳貪な聲で、

「叔母から來た、手紙は何處にあるか。」

と、妻の枕許に突立つて言つた。

妻は、靜かに體を動かしながら、

「彼處です。」と、言つた。

私は、妻の床から半分身を起して指さした方に行つた。もう、病氣になつてから、幾日も使つたことのない針箱の抽出を開いた。而して、其の中から妻の叔母から寄來した手紙を掴み出した。

手紙の中には、

「何分にもみなし子のことゝて、ひがみ心もありことゆゑ、わるいことした時には、叱りなされ、小さな時より、不仕合せな子供なれば、不憫をかけてやり下されたく……。」と、書いてある文字の上に私は、眼を速かに走らせて、三月五日の當地一番にてと書いてある處に來て瞳を止めて日附を確めた。而して、かう書いてある上は、もう、一度迎へに出て見なければ氣が濟まないと思つた。

此時、暮方の日がほんのりと、妻の枕許の障子の一部分に當つてゐた。

「もう、お前も起きたら何うだ。少し位苦しくても我慢してやるのだ。」

と、私は、自分の感情を其の儘、妻に向つて言つた。

妻が病氣にかゝつてから此の附近の口入宿を幾軒となく歩き廻つて下女を探ねたけれど、病人があつて、幼児のある家と聞いて來るものがなかつた。近所の人が親切心

で世話してくれた車屋の老婆は、まだ、六十になつたかならない位の年頃であつた。毎日、朝と暮方に來て飯の仕度をして歸つて行くのであつた。けれど、此の老婆のすることは、不潔で、親切心がなくて却つて不快に感ぜられた。昨日は朝來るのが十一時頃になつて漸く來たので、私が、これから、もう少し早く來てくれいと言つた。其れが老婆の癪に障つたと見えて今日から來なくなつた。

私は、こんな目に出遇ふ毎に、空虚な博愛主義を説くものゝ無意味にして愚なることを感ずるのである。自分等が憐む下層社會の者等や、多くの労働者は、自分等が考へるやうに自覺してゐるものでない。たとへ、五十年の生活を青空の下で共にして此の地上に住んでゐる人間といひながら、他の苦しみを見て、自分の苦しみの萬分の一にも思つてゐるものがない。幾百萬の人間の中には、稀に眞に他を愛し、他のために犠牲とならうとするものはあるかも知れぬけれど、殆んど、悉くは利己的で、無同情にして、冷酷である。然るにこの人生に縋つて、博愛を説くのは、自から弱いがために説くのではなからうか。極端に言へば、社會に道德の存在したのは、

自からの生を不安に感ずるためにこの正義といふものを楯にした、人間共通の弱點でなかつたらうか。たゞ、獨り野獸の如く體力さへ強かつたなら、この自然力に對抗して戦つて行くことが出来ると思つた。

私は、獨り、うす暗く、灰色からだん／＼と黒色に變つて行く障子戸を見詰めて、空想に耽りながら坐つてゐると、遠く、生活といふ盲目の本性のために争ひ戦つてゐる人間と、石炭の熱度で運轉する物質文明とが、さながら肉の聲と鐵の響きとが相連れあつて、地獄を呪ふ歌の如くに空に向つて訴へてゐる。

「また、日が暮れるのだ。」

と、私は、常の如く變化なき夕暮を見て言つた。自分の死ぬまでに、こんな夕暮をこれか幾たび見るであらう。此時、勝手許で音が聞えた。其處に働いてゐる妻は、今日で三日間、飯を食べなかつた。あゝして、病んで苦し中を起きて働かなければならぬのも、やはり生活をなすつゝあるからの責任の如く感ぜられた。私は、尙ほ、長い未來に戦鬪と苦痛とを経なければならぬといふことを考へるのが苦しかつた。さながら暗澹として夜の垂れかゝつた沙漠の中に一人居残されて坐つてゐるやうな心

細さと寂寥とを感じた。

四

母に抱かれて眠つてゐた幼兒は、母が、床を抜け出た後にもやはり何も知らずに眠つてゐた。此時、私は裏の庭に出て、猫は、何處にあるだらうかと探したのであつた。

夕暮方の空には、灰色の雲が亂れてゐた。やがて襲はんとしてゐた夜は、其の雲の斷れ間から下界を覗いてゐる。風は、悲しげに吹いた。庭に出て見ると羅漢松の葉が黒い帽子を被つたやうに鬱然として、音もなく木の蔭には闇が屯を造つてゐた。

ふと、青桐の木が、太い枝をくつきりとうす明るい空に浮き出してゐるのを見て、私の心は、何物にか驚かさされた。よく考へて見ると、其れは、何時であつたか、「前世界」といふ書物を見た時にあつた、巨大な動物の遺骨の圖に何處かに似てゐたからであつた。

長い冬の間、太陽の光りは、此の庭の上に射さなかつた。秋の頃、繁つてゐた薄や菊などが赤く枯れてゐた。

春が来て、時節はめぐつても、冬の遺して行つた傷痕は取り去ることが出来なかつた。而して、赤い花咲く草花の根は腐れたと見えて、哀れな花壇には、緑色の芽も見られなかつた。

たゞ、土の色は黒くなつて、凍傷を起した生物の膚を見るやうに、醜くなつてゐた。私は、眉を蹙めて地の面を見詰めたけれど、虚心の土は何の苦痛も語らなかつた。而して、黙り返つてゐる地面は、獨り殘忍の冬が荒して行つたまゝにしてあつた。私は、この寒い、暗い、陰氣な庭を見舞つて、小さな猫の名を呼んだのである。

低い、呻くやうな啼聲が、羅漢松の木蔭から聞えた。私は、うす闇を透しながら、忍び足に、その啼聲のする方へと近寄つた。此時、地平線から全く、太陽の光りが沈んでしまつたと共に、冷えきつた空氣は何處からともなく地球の上に襲つて來た。此の一本の木にも、また、寒い風は吹いたのである。其の木の下に、白と黒の斑毛の小さな猫は、眠として竦んでゐた。私は、この小猫が、茫然として、夜になりつゝあるのも知らずに、かうして此處に眠として居る心を悟り兼ねたのである。

「なんで、こんなに寒くなつたのに、此處にかうしてあ

るのだ。」

と、言つて、私は、慄へてゐる獸物を抱き上げた。猫の體は、凍えたやうに冷たくなつてゐるのを感じたと同時に、私の、心には憐憫の情が浮んで來て、涙が眼に湧いたのであつた。——自分の力で、何うにでもなるやうな弱いものは、憫れんでやらなければならぬと思つたからである。而して、自分も、猫も、いつか死んでしまはなければならぬ同じ運命を持つて此の世に生れて來たものであると思つたからである。而して、人間は心の苦しさ、悲しさを言葉に出して訴へることが、出来るけれど、この哀れな動物には、物言ふことが出来ぬと思つたからである。私は、自分が此の世に於て孤獨であるよりも、一層此の小猫が此の世に於て孤獨であるやうに感じたのであつた。

私は、慄へてゐる小猫を懷の中に押し入れて、自分の温味で暖めてやらうと思つた。

五

この猫は、私が、街から拾つて來たのであつた。木

枯に夕陽の色は傷んで、うす黄色に西の空を染めた二月の夕暮方であつた。彼方から、剣を佩げた兵隊の一行が、乾いた途の上に白い煙りのやうな塵埃を上げて靴音を立て來た。彼等は、西から來て街を東の方に行かうとした。

其處、此處に子供等の遊んでゐる叫び聲が聞えた。赤い、星のやうな軒燈は木枯に磨ぎ澄されて、菓子屋には、青い瓦斯の光りが硝子戸を射し透して往來の上を照らしてゐた。此時、隣の足袋屋では、店頭の戸を閉してしまつた。

この足袋屋の前の途の上に、白い小さな猫が眠としてゐて動かなかつた。兵隊の一行は、間近かに足音を立て來かゝつたけれど、猫は驚いて逃げようとしなかつた。

私は、この有様を見て其の猫を追はうとした。すると小猫は、曾て私を見知つてゐた人のやうに、さも懐しげに顔を見上げて啼いた。私は、其の小猫を抱き上げて、衝突しかゝつた兵隊の列から慌て避けた。而して、この誰でも通つて差支へない往來の上を獨り、威張つて通る兵隊を面憎く思つた。

若し、私が、救つてやらなかつたら、この小猫は、一直線にしか進むことの出来ない自動機械のやうな兵隊の靴の踵の下に踏み潰されて、今頃は、血を吐いて路の上に斃れてゐるであらう。而して誰も、この哀れな動物の死について、餘り多く悲しみもしないだらうと考へた。

私は、其時、暫らく小猫を抱いたまゝ、兵隊を見送つて、道の上に佇んでゐた。街を行く人々に、いかなる思ひを抱かせたか知らないけれど、人々は私の顔を見守つて過ぎた。私は、猫を救つたのに何の不思議もない。何が珍らしくて、自分の顔を見守つて過ぎるのか不快に感ぜられた。而して、私は、其等の人々を無神経な、無同情な、冷かな人間の如く見做して、憎惡の眸を以て見返してやつた。恐らく、私の見返すのが、睨んだやうに見えたであらう。何となれば、中には、急に下を向いて氣まり悪さうにして、行つてしまふ者もあつたからだ。西の地平線に沈んだ黄色な入日の名残りは次第にうすれかゝつた。寂しい、灰色の冬の日は暮れて、家々では戸を閉して長い、寒い沈黙の夜の來ることを思はせた。けれど誰も哀れな小猫のために戸の外に出て來て呼ぶものをも見なければ、探して歩くものをも見なかつた。

私は、小猫を抱いて四五軒此方に來かゝると、明るい光りを路上に投げてゐる家があつた。其家は酒屋で、店頭みせさきの戸を開いて、小僧や若者等が立働いてゐるのを見た。

「この小猫は、どこの知りませんか。」

と、私は、酒屋の前に立つて明るい方に顔を向けて聞いた。

小僧や、若者等は、何れもちよつと暗い、外の方を見たが直ぐ、燈火の下で、脊を圓くして下に屈んで早く片附けてしまはうと働き始めた。たゞ十五六の小僧が、國のことも考へ出してゐたのであらうか、ぼんやりと立ちながら此方を見て白い息で、指頭を温めてゐたが、「知りませんね。」と、眠さうな聲で、答へた。

六

私は、街から、この小猫を拾つて來た日のことを思ひ出しながら、家の内に、小猫を連れて入つた。雲の亂れた空の下を寒い風が走つた。私は、縁側にと直に雨戸を閉めてしまつた。

毎夜の義務に疲れたやうに、うす赤味を帶んだランプの光りが、一室に置かれてある物の上を悲しく彩つてゐた。ランプの下に坐つてゐる青い妻の顔の上にも妻に抱かれた瘦せてゐる幼児の上にも、又、私の腕から離されて室の片隅に小さくなつて疎んでゐる哀れな猫の上にも、一樣にうす赤い不安な光りは漂てゐる。此時、急に、私には、妻と子供と、この小猫の行末がどうなることだらうかと淋しく感ぜられた。何となれば、自分が是等の自分よりは弱い者の生活を保護して行かなければならないからである。私は、自分の境遇と、社會に對する反抗力と戦闘力ともいふべきものを考へたのである。而して、其處には、其の人の努力で動かすことの出来ない逆境と名づけられた一種の暗い運命の存在することに思ひ至つた。

この暗い、冷かな翼に掩はれて、終生明るい日の光りを見ずに死んだ人々が幾何あるか知れない。主義を持つてゐるために、また、自分でどうすることも出来ない不調和の性格を持つてゐるために、よぎなくせられた者を見もし、また知りもしてゐるのであつた。さう考へる自分もまた其の一人であるまいか。